

北太平洋と日本におけるさけ・ます類の資源と増殖

佐藤 恵久雄 (企画課情報係長)

2002年の北太平洋

漁獲数

第11回NPAFC年次会議における各国の報告によると、2002年1-12月の北太平洋の漁獲数は3億400万尾で、前年の3億9,800万尾より24%減少しました(図1A)。

これを魚種別に見ると、カラフトマスが最も多い1億8,100万尾で全体の60%を占めており、前年の2億6,900万尾に比べ33%減少しました。次いでサケが8,100万尾(構成比27%、対前年比93%)、ベニザケが3,500万尾(構成比11%、対前年比99%)と続き、これら3魚種で98%を占めています。ギンザケとマスノスケは、報告がなかったWOCIの漁獲数を除くとそれぞれ対前年比103%、165%であり、また、スチールヘッドとサクラマスは報告がありませんでした(図1A)。

地域別では、アラスカ州が1億3,100万尾と最も多く、以下、ロシア9,400万尾、日本6,700万尾、カナダ1,200万尾と続いています(図1B)。なお、2002年のWOCI分は未報告であったほか、新たにNPAFCへ加盟した韓国はサケの漁獲数が6万尾と報告されました。

人工ふ化放流数

2002年1-12月に人工ふ化放流された幼稚魚数は49億8,000万尾で、このうち前年の報告がなかったWOCIの放流数を除くと、本年の46億4,000万尾に対し前年は43億8,000万尾で6%増加しました。

魚種別ではサケが28億3,000万尾で半数以上を占め、これに次ぐカラフトマスの14億5,000万尾と合わせると全体の9割を占めます。

地域別では日本が20億1,000万尾と最も多く、以下、アラスカ州14億8,000万尾、ロシア6億7,000万尾、カナダ4億7,000万尾、WOCI3億4,000万尾、韓国1,000万尾と続いています(図1C)。

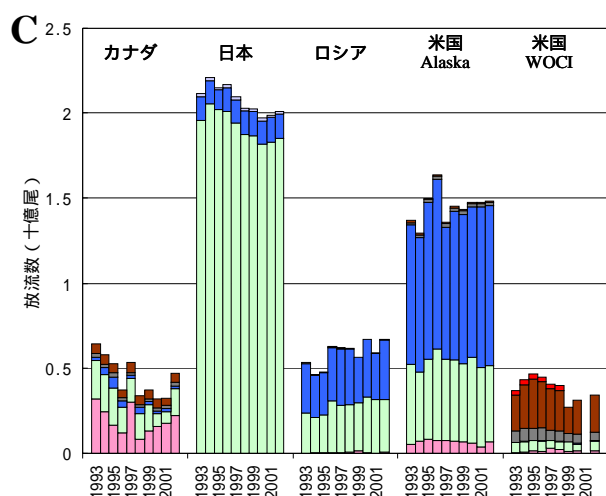
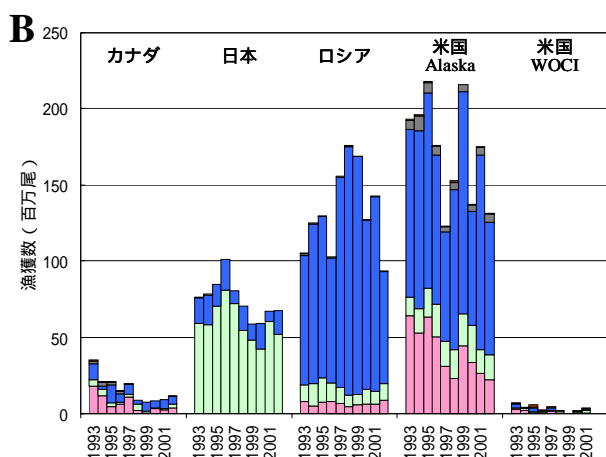
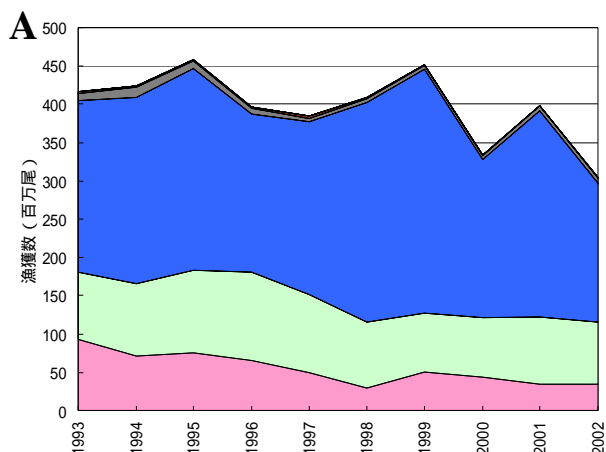


図1. 1993-2002年の北太平洋におけるさけ・ます類の魚種別漁獲数(A)、地域別魚種別の漁獲数(B)及び人工ふ化放流数(C)。1993-1998年は「NPAFC Statistical Yearbook」による商業漁獲数の確定値だが、1999年以降はNPAFC年次報告等で示された暫定値である。1998年までのロシアにはEEZ(排他的経済水域)で他国が漁獲したものを含む。WOCIはワシントン、オレゴン、カリフォルニア、アイダホ州の合計。WOCIで図示していない年があるのは未報告のためである。韓国は他国と比較してわずかなため、図では省略している。

■ 魚種未報告 ■ ベニザケ ■ サケ
■ カラフトマス ■ ギンザケ ■ マスノスケ
■ スチールヘッド ■ サクラマス

2003年度の日本

サケ

2003年度の来遊数（沿岸海面での商業漁獲と内水面での親魚捕獲の合計）は12月31日現在で7,300万尾、前年度同期比128%となっています。来遊数は1996年度に過去最高を記録して以来、4年連続で減少していましたが、2001年度以降は増加傾向に転じています（図2）。

これを道府県別にみると、北海道が前年度比134%と大幅に増加して過去最高となったほか、絶対数は少ないものの関東内陸各県でも130%以上となりました。対照的に日本海側の新潟県以南

では80%未満となりました（図3）。

一方、海区別に最近10年間の動向をみると、いずれも1995年度前後に高い値を示した後に数年連続して減少していますが、その後は本州太平洋と北海道日本海が低水準のままなのに対し、他の海区では再び増加する傾向がうかがえます。特に2003年度は、オホーツク海とえりも以西が前年度比160%に達する大幅な増加となりました（図4）。

なお、採卵数は既に22億1,000万粒を確保し、計画数21億7,000万粒を満たしていることから、放流数もほぼ計画どおり18億1,000万尾程度と見込まれます。

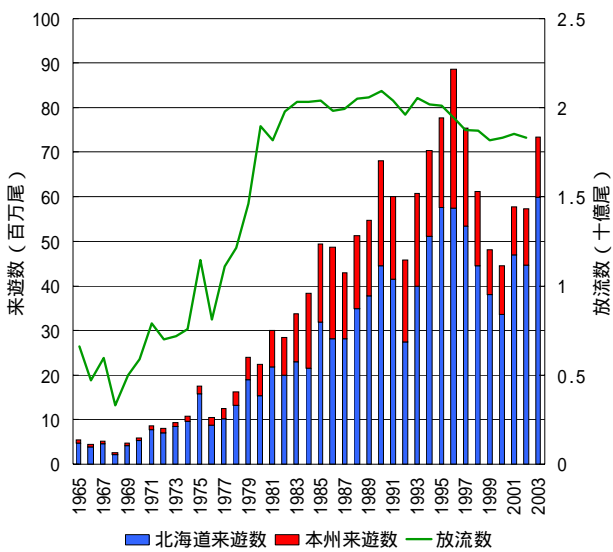


図2. 1965-2003年度の日本におけるサケの来遊数と人工ふ化放流数。2003年度は12月31日現在。

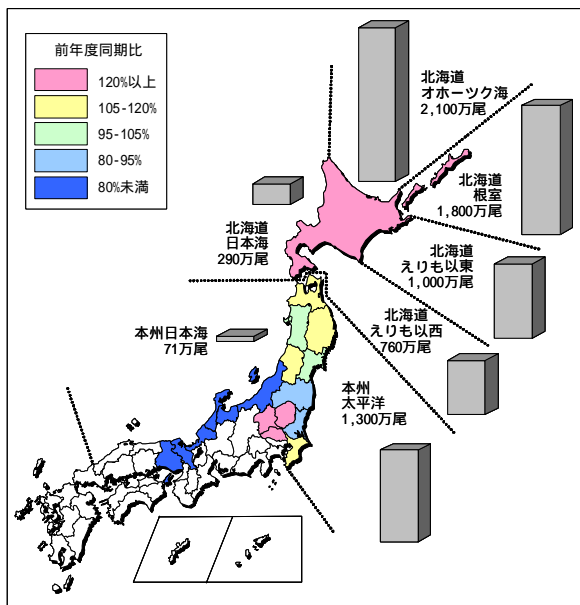


図3. 2003年12月31日現在の日本におけるサケの来遊数。直方体の高さは来遊数の相対的な大小、色分けは対前年度同期比を示す。

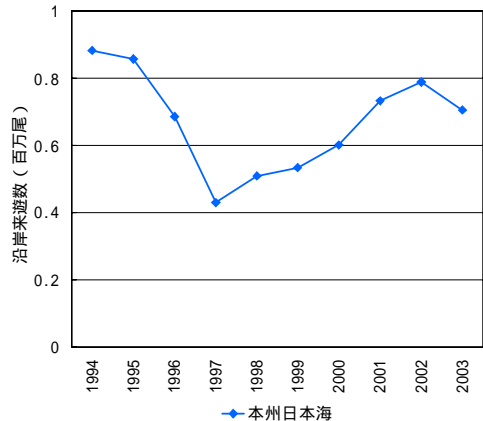
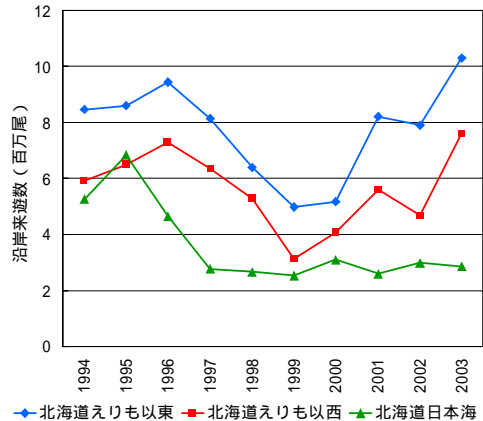
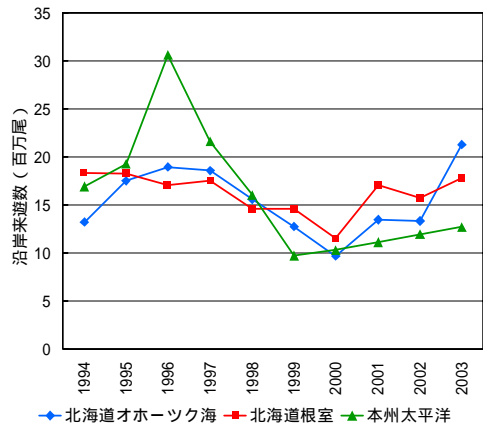


図4. 1994-2003年度の日本におけるサケの海区別来遊数。2003年度は12月31日現在。

カラフトマス

主産地である北海道における2003年度来遊数は1,200万尾で前年度比88%となりました。カラフトマスの来遊数は1991年度以降急増するとともに、1991-2002年の偶数年級群での平均が1,400万尾、奇数年級群のそれは700万尾で、両者にはおよそ2倍の開きがあります。こうしたなかにおいて2003年度は奇数年級としては異例に高い水準となっています。なお、採卵数は1億8,000万粒でほぼ前年と同数なので、放流数も前年並みの1億4,000万尾程度と見込まれます(図5)。

サクラマス

2003年度の北海道における河川捕獲数は17,600尾で前年度比133%と大きく増加しました。しかし、これは1河川での急増によるもので、河川によっては逆に大きく減少したものもあります。このため採卵数は480万粒で前年度比91%にとどまりました。なお、本州の資源については現在調査中です(図6)。

ベニザケ

当センターでは北海道の3河川でベニザケの人工ふ化放流に取り組んでいますが、2003年度の河川捕獲数は270尾、採卵数は25万粒で、前年度よりは若干増加しました。近年は残念ながら1990年代前半に比べると少ない状態が続いています(図7)。

放流数の年度区分

放流数に用いる年度区分については、一般的な3月末で区切る会計年度とは期間が異なります。サケの場合を例にとると、親魚の回帰時期は8月から2月にかけてで、この親魚から得た種苗は翌年の1月から6月にかけて放流されます。サケの人工ふ化放流は親魚の捕獲を起点として、その親魚から得た種苗を放流し終えるまでを一つの周期としているため、「2003年度来遊数」は2003年8月から2004年2月にかけて来遊した尾数を指しますが、「2003年度放流数」の場合は2004年1月から同年6月までに放流された尾数を指しており、会計年度でいうところの2004年度に放流した分も一部含まれています。

なお、NPAFCの統計の場合は漁獲も人工ふ化放流も年、すなわち1月から12月までを単位とすると定められています。このため本稿では、NPAFCの資料を使用する北太平洋の漁獲数、放流数については「年」、日本の来遊数、放流数等については「年度」と使い分けており、例えば2002年の放流数と2002年度のそれは一致しないのでご注意ください。

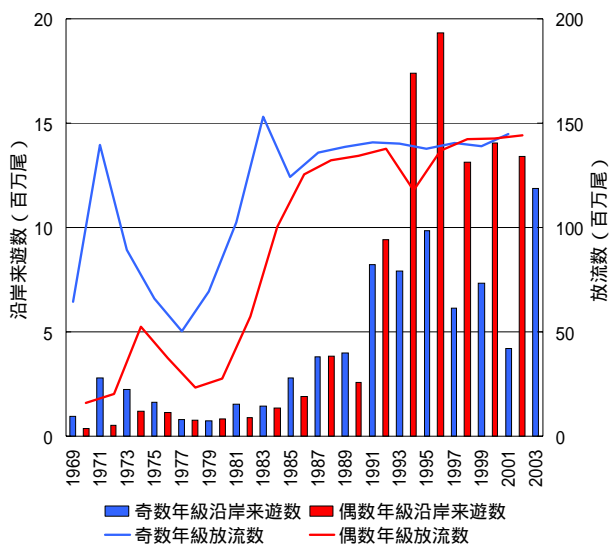


図5. 1969-2003年度の日本におけるカラフトマスの来遊数と人工ふ化放流数。2003年度は概数。

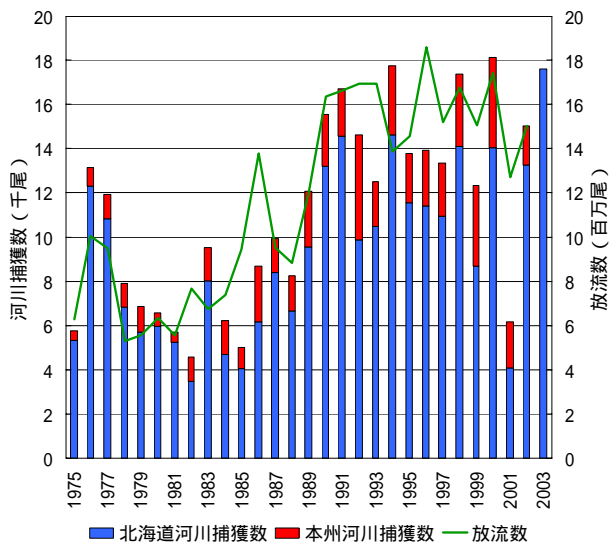


図6. 1975-2003年度の日本におけるサクラマスの河川捕獲数と人工ふ化放流数。2002-2003年度は概数。

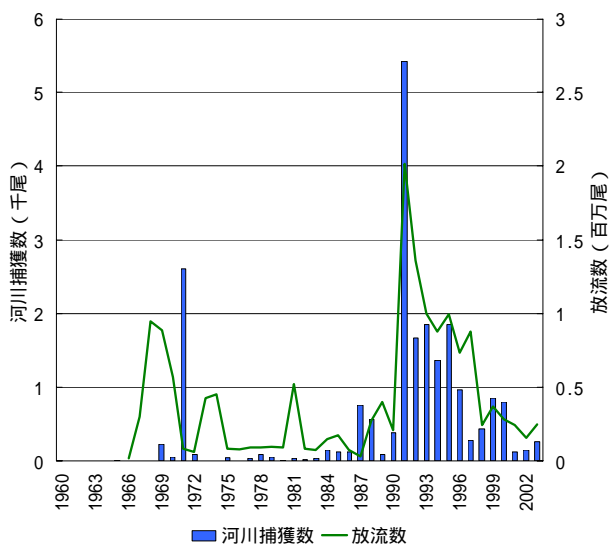


図7. 1960-2003年度の日本におけるベニザケの河川捕獲数と人工ふ化放流数。